

---

# テイルズオブサイレンス

敬愛

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

テイルズオブサイレンス

### 【Nコード】

N1673M

### 【作者名】

敬愛

### 【あらすじ】

基本的に俺と健人君と静香ちゃんの物語。

普段全く外に出ない僕が頭をひねりにひねって書く初めての小説ぽい小説。

純文学のつもりだったが異世界とか勇者とかオリ主とかテンプレとかチートとか  
ようわからんが人気な作品に影響を受け  
真似してみる。

## 用語解説（前書き）

随時更新。

名前の由来はだいたい僕の浅はかな知識と貧困なポキヤブラリーによる。

## 用語解説

「ジルバ」シドの居る国。 「マルク」讓、静香の降り立った国

「バトルチェンジ」上位属性にランクアップする事

ソードマスター・アーチャー・ウォーリアー・セイント・アサシンなど。

下位属性は順に剣士・弓使い・斧使い・ケアマネージャー・くない使い。

「エルクス」かつてマルクとジルバを繋いでいたという光の道

「世界の形」ワンス・ダ・シユリビオンと呼ばれている。ヘブラ・エルサム語で讓達の現実世界ではB・C・5000くらいに誕生したとワイナ・アホヤネが提唱した。ワイナはサヴァン症候群で両親以外とは接触した事が無いので真の名前を知っているのはシドくらいである。他の者はそんな事知らなくても生きていけると思っている。

四神獣が周りを囲む四角い平面の大地。角にはエリシユオン・ジパング・シャングリラ・ヘブンがあると言う。四神獣がそれぞれ守護している。

「キュア・破魔調律・ケアマネジメント」

セイントになるために必要な資質。讓はキュアは最初から使えた。今後セイントのモリスとジョージに破魔調律を教わることになる。主に僧侶系の冷系魔法、炎系魔法が使えるが弱い。結界等の拘束術の方が強力である。ケアマネジメントはモリスから貰った百年エメラルドを媒体として初実戦で成功させた。



## いなくなった健人

今頃あいつ何してるかな。死んでいないだろうな？

そいつは三年前忽然と消えた。

卒業式の日、そいつの彼女は動揺していた。

「健人、何処行っちゃったの？」

朝方メールが来ていたらしい。「ヤバイ。俺もうダメだ。」

帰り道、健人の家にその彼女、静香と寄ってみると

鍵はかかっておらず部屋はもぬけの殻だった。

楽しい事ばかり喰って生きていける若い頃。

この部屋で静香の作った鍋を食べたり、お泊り会を

したり。思い出が沢山詰まった部屋が今は、カーテン

の無いマンション7階の日当たりの良い窓から、春の

絹ごしされた清涼な光が差し込んで埃を照らしていた。

静香は今でも健人を待っている。看護師を目指して。

俺と同じ大学に通いながら。

俺はというと大学に通いながらロックバンドをやっている。

CDを出すと二千枚くらい売れる。インディーズ界ではそこそこ有名だ。ライブでも箱に千人入る。

将来有望かもしれない。「Rising」という事務所に所属している。

バンド名は「Silence」

ロックには合わない名前だが、静香の名前から取った物だ。

彼女も気付いて結構喜んでいる。頑張つてねと。

大学では社会福祉を専攻している。将来は福祉・医療の

現場で頑張ろうと三人で昔約束した。健人と静香もこの大学に合格して三人で頑張ろうとした矢先、あいつはいなくなった。

ご両親も捜索願いを出しているがこの三年間これといった情報は無い。全く神隠しでもあるまいに。でもどこかで元気でやってるはずだと俺は楽観視している。そうしなければ静香がマイってしまつから。

俺は両親を早くに亡くした。火事だ。両親は二階で寝ていた。

俺は一階で父のタバコにライターで火を付け、ビックリして近くに  
あつた灯油で火を消そうと思って。それで……。燃えた。全部。

5歳の時。逃げるのが精一杯だった。119も知らなかった。

火災保険と両親の生命保険2千万が下りて来て祖父母に預けられて  
育った。

もちろんどちらの家も俺を良くは見ていなかった。しかし1日1千円  
は必ずくれた。どういうわけかどちらの家でも1日1千円貰えた。

食事が白米しか出てこない事があったので、ふりかけや卵を買った。

それを良く覚えている。静香や健人と出会ったのもこの頃だ。



## カレーへのこだわり

ここは大学内の食堂。学生食堂という響きとは縁遠い

全面ガラス張りのお洒落な空間。

静香と食事をしている。俺はカレーが好きだ。静香の得意料理だから。

静香は実にその空間にマッチしていて、一見恋人同士に見えるかもしれない。

いやしかしたただの幼馴染だ。それが実態だ。それ以上でもそれ以下でもない。

健人が失踪してから食欲を無くし気味の静香は大好きなカルボナーラを頼む時でも

いつも半分残す。俺はカレーには卵とソースをかけて食べるのが好きなのだが、

静香がカルボナーラを頼む時には残り物を頂いて、カレーに混ぜて食う。

最初は嫌がってた静香も、最近はおもったいないからいいよと言ってくれる。

まあ間接キスくらいしても健人も怒らないだろう。子供じゃあるまいに。

「俺もう21だぜ。」

ついつつかり独り言を言ったら静香は怪訝そうな顔でこちらを見てくる。

今日はカルボナーラではなくミニバジルピザを食っているの、じやあ遠慮

なく卵を割り落とし、片隅にあったソースに手を伸ばすと「ちょっと譲」と

がっしり右手を掴まれた。そうそう静香の前ではカレーにソースをかけない

約束だったんだ。一人で食うときはいいんだが。

昔、静香が俺の為に珍しく得意のカレーを作ってくれたとき、健人はコールスロー

サラダを食っていた。ベジタリアンだったんだ。あいつは。肉屋を営んでる

両親が豚や牛を切り分けるのを見て、残酷だ。何故人間は生命を奪わなきゃ

生きていけない？同じ命なのに。と子供心にも相当悩んだようである日突然

父ちゃん、母ちゃん、俺肉食わねえからと言い出した、らしい。

大人になるとそれが高じて魚も食わなくなったらしい。話が横道に逸れた。

カレーを作ってくれたとき、俺はソースと醤油を間違っかけてしまい全部

残してしまったのだった。醤油派の気持ちはわからなかった。今でもカレーには

ソース、名前は譲だがこれは譲れない。それで怒った静香が二度と私の前では

カレーにソースはかけないで、絶対。と無理矢理約束させられてしまったのだった。

食い物の恨みは怖い。

## 講堂にて

大学の講堂、いつ入っても息苦しい。基本人がたくさんいる所は苦手だ。

教授様は今日もノーマライゼーションの重要性を説いている。

そりゃ健常者にも障害者にも等しく人権という物がある。

最初ミケルセンが初めて用い、ニルジェが生活サイクルにこれを導入した。

それは高校の時から知っている。

ではこの講堂での授業はノーマライゼーションの原則にのっとっているだろうか？

小学生、中学生、高校生までは個別の机なのに、大学生になると途端に大人扱いだ。

俺は犯罪者にはならないぞ。ははは、親殺しが何言ってやがるという声が聞こえた

ような気がした。15年前の話だろ。時効さ。すまない父さん、母さん。

俺はやっぱり少し捻くれて育っちゃった。

教授様のポジションは奪えそうも無い。肥溜めにぶちこまれてそれ

に溶けて行く。

今の俺にはそれしか出来ない。

カリカリ、カリカリ。隣の静香は熱心にルーズリーフに教授の言っている事を

書き込んでいく。仕方ない見習うかと思うが、この牛舎の中の牛みたいな環境

では飼い主の手でも舐めてやりたいところだ。その代わりと言っ  
はなんだが

居眠りで涎を垂らす事としよう。講義はまだ始まったばかり。俺は  
財布の中に

入れているハルシオンを誰にも見られないように一錠飲む。

あの一件、健人の件。俺は人のいる場所では眠れない。自分の部屋  
でも眠れない

というのに。丸三日間寝なかった事がある。流石に精神科に行つて  
眠れませんか

言つと、CTスキャンと脳波を取られ異常は無いようだから睡眠導  
入剤処方してくね、

と軽々ハルシオンが手に入る様になった。小さいクリニックはすぐ  
に薬を出してくれる

から助かる。ヤブでも何でも良いんだ。ただ俺は昔から悪夢を良く見るから眠るのが

怖くておクスリが必要なんだ。すぐ眠くなった。九十分経って「讓  
終わったよ。」

その声を聞く寸前に丁度目覚めた。「後でノートコピーしておいて  
くれ。」

しょうがないなあという顔付きで図書室に静香は向かった。

ちょっとフラフラするが頭がすっきりした。ハルシオンの半減期は  
何分だったか。

まあいいや。ついでにコーヒーでも飲むか。

俺はブラックコーヒーが大の苦手で、ミルクと砂糖入りの茶色くて  
長いコーヒー

しか飲めない。静香からはお子ちゃま扱いだ。ガキの頃から味覚が  
全く成長していない。

味蕾が少ないんだろ。きっと。家政学の授業でそういう事を習った  
ような気がする。

今は一人暮らしだから、家政学の講義は積極的に受けていきたい。  
クックパッドも

便利だがレシピ多すぎ。でも料理は実践に限る。男の料理なら尚更。

## ホスピス

俺はおじいちゃん、おばあちゃんが好きだ。例え呆けていたって、おむつが

必要だって、寝たきりだって。手に刻まれた皺。それが私達ここまで生きてきました、

という誇らしげな勲章のように見えるのだ。

面倒を見てくれていた父方、母方の祖父母も両家とも祖父が亡くなりおばあちゃんだけ

だ。ぴんぴんしている。ああ、ありがたいなと思う。最近は打って変わったように両家

のおばあちゃんは優しい。社会福祉士を取ったら介護福祉士も取って身の回りの世話を

してあげられたらなんて思う。 magari なりにも両親を事故で死なせてしまった俺を

育ててくれたおばあちゃん達に恩返しをしたい。そんな心境になったのにはある理由が

ある。母の父はガンで死んだ。金はあつたからホスピスに入れた。毎日モルヒネを打つ

ていたが最期は意識は混濁し、植物人間みたいなものだった。安ら

かな死、そう言って

良いのだろうか。

ドラマ白い巨塔で財前五郎が肺がんで死ぬ間際、呼吸困難に陥り送管しようとした時

その妻は喋れなくなるなら送管等しなくても良いと言った。里見脩二に宛てた手紙、そ

れはまさに神の手を持つ外科医のガン患者に対する処置のバイブルだった。

ドラマ東京タワー おかんと僕と時々おとんでは、おかんは最期抗がん剤治療があまり

にも苦しく息子にもう治療を諦める事を宣言する。それから明るく余生を過ごした。

そついうのを見てると果たして安楽に死ぬる事は本当にその人にとって幸せなのか

等とがらにもなく考えてしまふ。



## J・POPとクラシック

死と言えば図書館でキューブラー・ロス女史の「死の瞬間」を読んだ事があるが

さっぱり内容は理解できなかったな。本もタイトルで惹かれて買うとどんすべり

する事がある。その点CDなんかは偉大なんじゃないかな。可愛い女の子やむさ苦しい

イケメンのジャケの中になんとも言えない不思議な感覚にとらわれるジャケットという

のがある。相対性理論とか東京事変なんかは遊び心に溢れていていいよな。思わず買っ

ちやう。

最近デジタル化が進んでCDもさっぱり売れないが固定ファンがついている

アーティストはやっぱり強い。シースルーの衣装で巻き起こせ嵐、嵐、なんて歌ってた嵐も今では五十万枚はまず越えてくる。ジャニ系の中でも今や最強。

J・POPも飽きたから最近を着ったダウンロードでホントに厳選

した曲しか聴かない

けど。ロッカーなのにクラシックは良く聞くね。モーツァルトとか  
バッハ、ベートヴェ

ンはもちろん、ラフマニノフとかビゼーとかも。静香は専ら洋楽、  
バックストリートボ

ーイズとかが好きなのかな。

スピードラーニングとかDRIPPYじゃないけど洋楽聴いてると  
自然に英語が聞き取

れる様になるとは静香は言った。話すのは難しいらしいが。まあ  
俺達が目指す仕事に

英語はそれ程必要じゃない。カタカナ読めれば大丈夫だ。トメだの  
ハツだのお婆ちゃん

はカタカナの名前が多いから。でも明治生まれはほとんど死んでる  
からそういう傾向

も段々少なくなってきたはいる。

## 変わった出会い系の使い方

俺はメールはあまり好きじゃない。絵文字とかは確かにカワイイ。だが文面だけだと

どうしても誤解が生じ易くなるから必然的に短くなる。それが何回も来るのがウザイ。

メールが好きだった頃もあった。出会い系サイトが無料を詠い出すその前の時代だ。

写真だけを見て妄想を膨らまし会ってHする。単純だなあと思っていた。ポイント制

で一回メールを送るのに百円かかる。写メを見なければ三百円だ。ホントに短い自己紹

介文で「今暇なの。」とか「誰か夜の相手してくれない。」とか喰い付くと思うだろ。

俺はそういう男じゃない。俺が狙っていたのは13歳から15歳くらいの女の子だ。

ロリコンじゃないぞ。

「両親が離婚したんです。誰か話し相手が欲しいんです。」とか「周りの友達は皆Hして

ます。私処女捨てたいんです。」とかいう自己紹介だ。

実際会って説教してやるうと思ってた。16歳くらいの時だったかな。ケータイを二個

使ってそういう子にコンタクト取る為に大人ぶる必要があった。高速で、いいよ、話し

相手になってあげる、大人の世界はね、だの、俺なら優しくリード出来るよ。だから会

わないかとか。

下心全く無いわけじゃない。で会える事になった女の子が一人いた。クリスマスイブの

日に。そうしてクリスマス・イブの日に説教するのモムードがないなどと思いつつ、出か

ける身支度をしているとこんなメールが来た。「当サイトをご利用いただき誠にありがと

うございます。お知らせがあります。初回登録料二十万円が未払いとなっております。

御入金をお早目にお願ひします。なおポイントは全精算され、お客様は退会扱いとなり

ます。」

は？誰が払うかそんなもんで速攻で返信しようとしたら、宛て

先が見つかりません、

だって。クリスマスの日、俺はそのサイトのお問い合わせシステムを利用し、「おい、こ

らお前らの会社クリスマス休みか。ふざけるな。担当者だせよ。ぶち殺すぞ。」って書いて

て送ったら大晦日の日、お客様はブラックリスト会員になられました、ってなられました

たって偉いのかよ、それ。っていう笑い話。

それもメール嫌いの一因。でも携帯ない頃って家電で健人とたわいもない話を四時間も

五時間もしたものだけどな。今は携帯は一台しか持ってない。静香とバンドのメンバー

くらいとしかTELEしないから。携帯電話の普及は世界を確実に変えたね。昔取った杵

柄で携帯には少しうるさい。

## 歳を取るといふ事

「ねえねえサマークローズ超面白いよね。」珍しく静香が授業中に話し掛けてくる。

サマークローズというのは映画で今から千年後の未来、復活した伝説のヤンキ-が

PCウイルスを作り上げた東大卒の天才と、格闘ゲームで勝負をし（今のWii見たい

なの。もうその頃には人型アンドロイドが出来ていてプログラム次第で強さは自由自在）

負けるのだが、必死にコンピュータの勉強をし、ならばこちらもとウイルスを発明しち

やってお互いアンドロイドをハッキングし合うという設定の良くわからないSFアクション

ヨン3D映画で、静香のお気に入りのシーンは最後その伝説のヤンキ-が惜敗した後、

そのお婆ちゃん百歳が出てきて、わたしや年期が違うんだよとばかりにNASAやペン

タゴン、CIAのコンピュータを次々ハッキングし、ガンダムみたいな秘密ロボット

を遠隔操作し、東大卒のアンドロイドをめっちゃくっちゃに破壊し、アメリカの核ミサ

イル誤射を止めるというシーン。

「凄いよね。百歳だよ。誕生日百回迎えちゃってるんだよ。それがコンピューターって……」

痛快だし、未来のお年寄りのビジョンみたいで良くない？」

「まあそうだね。」

百歳……。楽じゃないよ。本心ではそう思う。アルツハイマーや脳梗塞後遺症で認知

症を発症したまだ七十にもならないお爺ちゃん、お婆ちゃんの地獄  
絵図のごとき生活を

実習で見た事がある。大学を卒業したら専門学校へ行って介護福祉  
士も、両

方取ろうと思っていた俺もさすがに心が折れた。

あれは人間の生活じゃない。人権剥ぎ取られている。運悪く未だに  
身体拘束を行って

る施設をみたせいもあるが、朝と夜の顔。この違い経験したものし  
かわからない。

朝はニコニコしながらオムツを替えたり、体位交換を行ったり、食

事介護を行ったり、

それはそれは平和なものだ。

しかし、夜になると始まる徘徊。目的も無く歩き回り排泄物をトイレではない所にした

り、それを弄便したり、身体拘束されてる利用者さんはオムツの中に強制排泄。痰が絡

んでも吸引してもらえず、コッポ、コッポ。施設の職員は「いつそ死んでくれたら楽な

んだけど。」なんて笑って言う。気持ちもわからなくもない。夜それは地獄。

人間の本能がむくむくと首をもたげる無間地獄。若い頃は綺麗だっただろうに、

男前だっただろうに、一人では何も出来ないのだ。歌の話じゃない。確かに夢の中で

現実の行動を行ってしまうのだ。静香もそれを乗り越えてきて今、横で静かに笑っている

る。ちょっとカワイイなと思った。俺馬鹿。健人が帰ってくるまでは必ずあいつの代わ

りを成し遂げる。そう心に誓っているんだ。



## 倉木麻衣とウタダ

今日は静香の買い物に付き合う。季節は夏だ。蝉が鳴いている。I  
- podしてるから

よくは聞こえないが。SUMMER SONGとSUMMER F  
REAKと

FEEL FINE!をリピートで聴いている。倉木麻衣は結構好  
きだ。一時期ウタダ

のパクリが現れたぞと話題になったが、しょっぱなから全然違う音  
楽性を志向している

のは確かだ。野次馬の類、ゴシップ、俺は大嫌いだ。人の足を引っ  
張って金をもらう奴

生きてく為に仕方が無いんです。という顔はしていないだろう。面  
白おかしければそれ

で良いなんていう享乐的な奴は反吐が出るぜ。

何を買うかと言うと女性用水着だ。なんで？俺に見せてどうするの  
？静香は結構なスポ

ーツマン。ソフトボール部でエースで四番だ。

「譲これどじつ？」

めっちゃ露出度の高いビキニ。鼻血出そうだ。冗談だろ。冗談だつたらしく紺のスクー

ル水着みたいなのをお買い上げ。地味だな、と思ったが静香の性的嗜好からいって妥当

だろう。

海水浴これ着ていくから。静香は言う。え？海水浴って何？

大学の夏休み海に行こうよ。って、えゝ全然聞いてない。

「昨日決めたんだもん。少し息抜きしないとね。」

俺がアウトドア派じゃない事を知っていて言っているのか。

海なんてもう何年も行ってないぞ。真つ暗なライブハウスで

この世の果てを、ギラギラ尖がった夜を演出している俺に海に行こう

というのか？

本気ですか？

「本気。」譲、音楽ばかり聴いたり歌ったりしてるでしょ。

たまに外で遊ぼうよ。うーんこれまでそんなお誘いでなかつただけだな。

どつという風の吹き回しか。

「シェークスピアは音楽を聴かない人間は信用するなって言ったよ。」

「あの人暗いでしょ。友達じゃないけど。オセロだのリア王だのマクベスだの

後何だっけ」

「ハムレットだよ。」

「ああ、そうそう、それぞれ。」

「一番有名なのを忘れてる。この娘は時々天然ボケをかます。頭は良いのだが。」

## ライブの風景

N 浜海水浴場で遊ぶ事に決まった。今度の日曜日。ってその日夜からライブの日だ。

近場だから朝早く出かけることにした。待ち合わせ時間は午前九時だが過ぎても

静香は来ない。どうしたんだろう。いつもは時間に正確な奴なのに。携帯に電話してみる。プルルルル。すぐに出た。

「あ、讓ゴメン。お父さんが交通事故起こしちゃって怪我したので、今病院だから

行けなくなっちゃった。切るね。ホントゴメンね。」

プチっ。

なんだよ、楽しみにしてたのに。病院だから電源切らないとダメなんだろうけど

よっぽど慌ててたんだろうな。静香のおじさん怪我が。大した事ないと良いんだが。

俺も運転下手くそだから気を付けないとな。

夜ライブハウス「ココノア」に俺はいた。地元では一番大きなライブハウスだ。

メンバーと円陣を組み「DON'T FEEL FEAR!」と手を重ねあつて掛け声を出す。

なんでこんなかけ声に決まったかというとお客さんがナイフを投げってくるからだ。

もちろん贗物だが。いつからこんなパフォーマンスが始まったか知らないが、歌詞

の内容が社会規範にあまりに外れているので、客もお前ら死ねやみたいなノリなのか

も。俺達の曲は客の鬱憤晴らしには最適だという事だろう。しかし「ノー・クラック」

という曲になると静かになる。シャブ中だった女が歳をとっても薬を止めず、若い男

と行為に励んでいる時に中毒で死ぬという歌なのだが、俺が弾き語りでやる静かな曲

だ。

俺が今のメンバーと出会う前、路上で何度も何度もこの曲を歌った。石を投げ付けら

れた事もあつた。水をぶっ掛けられた事もあつた。それでも俺はその曲のタイトル

の本当の意味に気づいてもらえるまで歌い続けた。この女は孤児で母親代わりにな

ってくれる人間はいたが父親代わりになってくれる人がいなかった。異性の親に愛

される事、愛されない事それがどれほどまでに重要かというメッセージを込めてい

た。そんな曲を熱心に聴いてくれたのが、今のメンバー三人だ。みんな母親がいな

い。俺も含めて。健人にも静香にも見せられない俺の心の闇。それを話せるのがメ

ンバーだった。

## バンドのメンバーと合コン

メンバー集めて合コン！静香には内緒。○大学のミスキャンパスが来るらしい。

惇のツテだ。惇はドラム。肩口にサソリの刺青を入れているが実はシール。

来た来た。うーんハズレ2人。当たり2人だな。ミスキャンパスだと思われる

娘は薄水色のキャミソール。

近藤が早速話し掛ける。1番カワイイと思われる娘に。近藤はベースだ。ねえねえ

君ミスキャンパスなんだって？

ってそんながつついたら女の子引くだろ……。

「いえ、違いますよ。ミスキャンパスはあの娘です。」その娘は冷静に俺がハズレだ

と思っていた女の子を指さした。

「ああそうなんだ。ふーん確かにカワイイね。」近藤の目が腐ってるのか、俺の目

がおかしいのか……。ちなみに静香は一重で目が切れ長で鼻は

そんなに高くなく

唇がプリツとしてる。美人だと思う。実際モデルし。審美眼は確かな筈だ。その娘は

巨乳だった。近藤は巨乳に目が無い。顔も可愛く見えてしまうのだろう。

ところが博までが「やっぱりオーラが違うよね。」等と言い出した。博はギター。

ロボートの山本博みたいに目立たないからあだ名。本名は伊集院元気。フルネーム

で呼ばれる時、名前を呼ばれているのか、体調を尋ねられているのか戸惑うのが悩み。

ギターのくせに短髪で服のセンスもダサい。

おいおい、こいつらみんな巨乳ファンだよ。ミスキャンパスの審査員も酷いよな。

俺がカワイイと思った娘は結構というか相当大人しくまるで喋らない。

ミスキャンパスばかりちゃほやされるので他の3人はつまらなさそうだ。

とりわけそのおとなしい子が。



## 俺は案外モテる

ちなみに最近どんなゲームが流行っているのかさっぱりわからないので

ネズツチ謎掛けを始めようと思った。が思いつかない。思いつくわけ無いだろ。

あの人天才でしょ。見てて怖いよ。整えるの早すぎて。

「あゝもう終電。」ミスキャンパスの女の子が言った。ちなみにメンバーは全員車

を持っていない。メルアドくらい聞いても良さそうな物だが全員失敗したらしい。

俺はそんなに飲んでないが飲酒運転で捕まるのが嫌なので、運転は出来ない。

他の三人は家が近いらしく、メンバーが送ってあげる事になった。最近物騒だから

あまり盛り上がってない合コンの後でも女の子だけで帰らせるわけにはいかない。

と思う。ミスキャンパスの娘を俺が送らなくてはならないようだ。

車は置いて、電車で帰ろう。気になっていたおとなしめの女の子は惇が送っていく事

になったようだ。

終電だった。車内はガラガラ。酔っ払いのサラリーマンと碇シンジをそのまま

大人にしたようなどこか人をイライラさせる学生風の男だけだった。

「ねえ、私酔っ払っちゃったみたいですよ。」

そう言って巨乳を押し付けてくる。こういう事は結構今までにもあった。

俺は実は結構モテルのだ。GLAYのTERUの昔の姿みたいなんって言われて、

EXZILEのTAKAHIROにも似てるといわれた事がある。その2人に共通項が

あるか？と思うがどっちもデキル奴には違いない。バンドのメンバーの中でも

俺がモテルのをやっかんてるのが特に惺。惺は見栄っ張りだからバンドの中で

ドラムという存在がいかに重要か。曲が終わる時ジャーンとラストを決めた時の

飛び散る汗のカッコ良さを主張してくる。等と冷静に考えていたら、もうブラが

見えそうになつていた。白いブラウスが彼女の胸の大きさを強調している。寒がり

なのか半袖ではなく長袖を着ている。

「キスしてくれませんか？」

そう言われて頭がちよつとグワングワンとした。静香とはキスはした事はない。

他の娘ともした事がない。つまり俺は実はファーストキスもまだなのだ。

が動揺はもうよそう。ごめん実は俺ゲイなんだ。言った瞬間ドン引きするミスキャン

パス。「じゃあどうして合コンなんか来るの！」「わかったメンバーの誰かと出来てる

んでしょ」

汚物を見るような目で見られた……。俺はゲイでもレスでも差別しないけどこの娘

性格悪いな。「次の駅で降りますから。さようなら安牌さん。」

プシュー。爺さんのすかしっ屁見たいな音を立てるドアに向かって逃げるように一目

散に駆け降りていった。

ふく顔の悪い娘は性格も悪い・・・事もあるな。ちよつと巨乳の感  
覚の余韻に浸りな

がら俺も電車を降りた。

## 健人の居場所

俺は二日酔いはした事がない。丈夫な肝臓に産んでくれた両親に感謝。

静香にも昨日の合コンであった事は気付かれてないようだ。

図書室で二人で読書。俺は太宰治全集。静香は志賀直哉全集。生前

反目しあっていた二人。

「やっぱり太宰先生は良いよな。アイロニーの漂わせ方が他の作家とはくらべものに

ならない。」

「あら志賀直哉は小説の神様よ。文壇であれほど力をもった方はいないわよ。」

「暗夜行路をくそみそに仰ってただろう。太宰先生は。実際あれは酔っ払いの愚痴み

たいな小説だよ。」

「如是我聞で志賀先生をこき下ろしてくれたわね。でも許してくださったのよ。」

寛大な方だわ。」

このままだとケンカになりそうだ。全集を読むのはよそう。

人間の体という小学生向けの図鑑みたいなのを見つけた。懐かしい。ペラペラペー

ジをめくる。静香が「あ、生殖器だって。エロい。」

小学生か？君は。「あれ、でもペニスと膣の説明がないわね。子供向けなのね。ホン

トに。」

外来語に日本語では合わないのではないかと思ったので静香に言ったら何よセクハ

ラ？言えないわよそんな卑猥な言葉。

たぶん彼女の頭の中では生殖器の様々な呼び方が走馬灯のように駆け巡ってるだろ

う。完全なるセクハラだ。健人がいたら喜んで静香を苛めるな。俺と一緒にあって・・・。

健人何してるだろうな？今頃。

「死を見つめる。死を見つめる。死を見つめる。死を見つめる。死を見つめる。」

ここは白石系暴力団霊王会。

朝の恒例の行事。みんな心臓の辺りに裸でドスを突きつけている。

その中で一際大きな声を出している男。 健人だった。

第一部 完

## 嫌な予感

そんな事とは露知らず静香と俺は現場実習に入る四年生になっていた。ここでし

っかり成果を上げレポートを書かないと卒業できない。社会福祉士は主として相談

業務を将来的には行う事が多い。静香が看護師の資格を取りたいと思ったのは大学

に入ってからで、一応社会福祉士も取る。その後首都医校みたいなところに入学し

て看護師の資格を取る。そういうプランらしい。静香もお年寄りは大好きでこれは

先述したエピソード等からもわかると思うがとにかく敬愛の心を強く持つてる。

両方持っていた方が有利なのだ。有利というかそういう個人的な打算的な考えでは

ないな……。いかに患者さんの心に寄り添えるか。それには社会福祉の勉強も必

要だという事だ。

静香は学校帰り必ずある神社に寄る。譲は来ないでね。と言われて



いるがどうやら

健人の帰ってくるのを祈っているらしい。

「終わったよ。待たせてゴメンネ。」

「何お願いしてるの？ 教えてよ。」あらかた知っているのにあえて聞く意地悪な

俺。「秘密。」そう言って寂しそうに笑った。俺も悲しくなつてじやあさじゃあさ

何個お願いしてるの？そう聞いた。「うーんじゃあ特別ね。えーと三つよ。」

三つ？ 看護師になりたいと健人帰ってきて欲しい以外に何かあるのか？

両親の長生き？ 世界の平和？ 男友達がたくさん出来ますように？最後のは

ちよつと考えづらいくけど静香の三つ目のお願いというのはわからなかった。先程

とは違って冷酷な目で薄く笑う、その目と唇に何か悪い予感がした。

「どつしたの譲。」

「いや今一瞬静香の後ろに黒い影が・・・」

俺はこれを霊的心理学と呼んでいる。相手が隠し事をしている時に  
霊の存在をほの

めかすとその反応で信心深いかどうかわかるのだ。

「嫌だ。もしかして守護霊かしら。」

「そうかもな。」

「ありがたいわね。逆に。携帯で写メでも撮ろうか?」

「そういう事をするとか守護霊は逃げてしまつというよ。」嘘だけど。

「そうなの。残念ね。」

俺は静香には何か今後悪い事が起こるかもしれないと思った。

霊を信じる人間というのは突然いなくなったり、憑き物に憑依され  
たりする事が信

じない人間より多いという話を聞いた事がある。ちよつと心配だ。  
さっきの静香の

様子を見た感じでは……。

## 使いっぱしり

健人コーヒー買って来い。若頭の金田が言う。「はい、わかりました。」

健人は人目につかないようにすぐ近くの自動販売機でブラックコーヒーを買った。

組の事務所に戻って金田さんどうぞと差し出すとレザアの五十万はするであろう

ソファに足を組んでタバコを吸っていた金田、いきなり健人に飛び蹴りを喰らわせた。

その後も殴り蹴りこう言った。「お前目ついてんのか！俺がいつも普通の缶コーヒーより

ちよつと細長い砂糖の入ったコーヒーが好きだつての知らねえつてのか！」

金田はキャメルを吸いながら甘い砂糖が舌に絡まってくるそのテイストがいたくお気に入り

だった。「すみません、すみません。久方ぶりに頼まれた物だから忘れていて。」

「ほんとポンコツだな。お前は。半年前ヤクザに追われてたお前を組に迎え入れてやったのも

「忘れたか？」

「すみません……。そうやって健人は金田利栄の靴磨きを始めた。キユキユ、キユキユ。」

「真新しいタオルとエルメスの靴が擦れ合う音が小気味良く聞こえてくる。」

「ほお、靴磨きは一級品だな。アイスクリーム屋は危うく殺されかけたってのにな」

「感謝してます。健人はそうやって靴に息を吹き掛けた。やりたくはなかった。ドラッグの売人等。」

「しかしどうしても金が欲しかった。あの頃実家の肉屋が潰れかけていた。地区再開発とかで大型」

「ショッピングセンターが出来てから客が全く来なくなったのだ。そんな時だった。悪魔の囁きが」

「メールに入ったのは。」

## 仲間

俺は落ち込んでいた。自分のチャラチャラ加減に嫌気がさした。利用者さんに軽々しく話

し掛けていたら、何かチャラチャラしている学生がいるわねと職員の間で噂になってるそう

なのだ。確かに髪は長いシタトゥーも入っている。しかし外見だけの問題ではなかった。指

にはめている指輪に排泄介助している時に便がついたので、必死こいて洗っていたらそれを

職員さんに見咎められそんなに大事なものならつけてくるんじゃないよ。私達なんて結婚指

輪も外しているのよ。と言われた。

みんな指輪なんてしてない。迂闊だった。実際に介助したのはその時が始めてで心の準備

が出来ていなかったと言ったら言い訳になってしまうな。怪我をさせてしまうので当然外す

べきだったのだ。職員さに試しにやってみてと言われた時点でテストが始まっていて、指輪

を外さなかった俺は0点という訳だ。心がこもっていないと評価さ

れたようだ。

俺は惇と近藤、元気に相談した。「俺バンド辞めようかな。」と言ったら何言ってるん

だ。俺たち4人一つだろ。一度の失敗で諦めんなよ。お前なら必ず両立出来ると言われた。

だっってお前優しいもん。

俺は不覚にもその言葉で泣いてしまった。俺たちのファンも利用者さんも同じくらい大切な

んだ。

どっちも守りたいとその時思った。とりあえず誠意を見せるため俺は床屋で髪を短く切り揃

えた。

静香には「どうしたの？ 失恋でもした？」と笑って言われたけど、彼女の息子を眺める

ような視線に俺は今にも抱きしめてやりたい衝動に駆られた。事の始終を話した。「そっ

か。譲、でも両手に花じゃない。それだけ可能性があるって事だよ。私は少し羨ましいな。

ほらネイルだってこの通りまるで手をつけてないしかもその職員さ

んも少しおかしいわよ。

事前に注意すれば良い事なのにテストみたいな事して譲の事まだそんなに知ってるわけでも

ないのにね。」その後譲は譲らしくやればいいよ。人の意見なんて気にしないで持ち前の優

しさがあれば伝わると思うな。と言った。嬉しかった。静香は俺の事を一個の人格として理

解してくれてる。仲間達の声援で俺は立ち直る事が出来た。墜落しそっだったが着陸許可が

出て俺は空母に無事着艦できた、そんな安堵感に包まれていた。

シド様（前書き）

段々話が見えなくなってきたぞ。自分自身でも見えないぞ。（笑）



## シド様

健人は考えていた。あのメールさえ来なければと。「お前アイス  
売人やってるだろ。」

差出人は全く知らない人間だった。「どこから仕入れてるかも知っ  
てるぞ。」ならば何故警

察に通報しない？

とにかく完全にバレている様だ。健人はメールの返信をした。何処  
の誰だかわからない人間

だが脅迫まがいのメールだ。相手のことを知らなくてはなるまい。

「お前は誰だ。」「お前

からアイス買った人間だよ。今は執行猶予期間中なんだ。」「何故  
メルアドを知って

る？」少し返信が遅れた後、「白石系暴力団霊王会・・・」その名  
前が出た後メールを送っ

てもうんともすんとも言わなくなった。白石系暴力団霊王会？ 聞  
いた事が無い。しかし

俺がアイスを買っているシド様は暴力団員ではない。普段はホーム  
レスをやっているがただ

の余興の大富豪だ。のはずだ。しかし考えてみれば俺はシド様の家

には言った事がないし、

金も貰った事が無い。アイスだって自分で使ってる様子もないしもちろん俺も使った事がな

い。ただ異世界にトリップ出来る薬だよ、と言われただけだ。その後こう付け加えられた。

その人に合った世界にねと・・・。

## 後悔の念（前書き）

この健人と譲の視点1話毎に変わる書き方読みづらいですよね。

なんか珍しい事に挑戦してみようと思ってやってるんですけど。

## 後悔の念

俺は髪を切ってから利用者さんと心を通わす事に一生懸命になれた。自分が笑顔になれ

ば相手も笑顔になる。そう信じていた。そんな時まるで喋れないほど衰弱しきった女性がい

た。俺は部分入れ歯の交換の介助をした。これは慣れていない者にはまだまだ難しい介助

で、俺は危うく歯を誤飲させる所だった。ゆっくり時間をかける事によって何とか交換を終

えた。

俺に芽生えたお年寄りへの愛情は確かに高まっているように思えた。その方に他に何かやつ

て欲しい事がありますか？ と聞いた。するとその女性はうな垂れ重い口取りで比較的是っ

きり言った。「私と代わって」と。「それは出来ませんよ」無意識の内に俺の脳の判断は人

の苦しみは他人には本当には理解できないという根拠からその言葉を吐いた。

老婆は大人しくなった。「そうよね」「そうですよ　さんなら乗

り越えられます」

そんな奇麗事を俺は口走っていた。間違っている……。的確な答えが必ずあったはずなん

だ。一日考えて昨日はああ言いましたけど本当はこう思っていましたと伝えよう。そう思っ

た。次の日その担当していた利用者さんが亡くなった事を聞いた。俺は号泣した。

初めてだったのだ。実地研修で利用者さんが亡くなったのは。それも自分の担当している

つい昨日心無い言葉で傷つけてしまったかもしれない、今日謝罪しようと思っていた方が。

俺はこう言おうと思っていた。「代わる事は出来ませんが　　さんはいつも俺の心の中にい

ますよ。」と。気休めかもしれないけど一日寝ずに考え出した俺なりの答えだった。それを

もう伝える事が出来ない。後悔の念が押し寄せてきていた。

## デモンズ

白石系暴力団霊王会には実は組長がいない特殊な組織である。3人のデモンズと呼ばれる

者達の合議で政策が決定されている。金田もその一人だ。健人は金田に二年前に出会った。

何やら新種のドラッグを売っているプツシャーが居ると言う噂を聞きつけて、そこは霊王会

の縄張りだったのでヤキを入れる為、店に（とは言ってもケータイ裏サイトでの予約制の路

上販売だが）近付いたのだった。

「おい。」アイスを買って求めに来た客と接触している健人に金田は声をかけた。

「ここが霊王会の縄張りだって知って商売してんのか。」

客は逃げていった。「これシャブだよなあ。」無言の健人。「ちょっと一袋貸せ。」

金田はこりゃ何だという顔をして、混ぜ物でもしてんのか、全然効かねえぞ。シャブじゃ

ねえじゃねえか。小麦粉でも売ってんのか。とにかく組に来い。商売してるのは間違いない

からな。そう言っ  
て健人に全治一  
カ月はかかる  
つかというく  
らい暴行を加え、  
無理矢理組員

に仕立て上げた。  
「サツに見つ  
かる前に止め  
られて良かった  
な。こんな訳  
のわからん新  
種の

ドラッグ売っ  
てたら何年ぶ  
ちこまれるか  
わからねえぞ。  
」そう言っ  
た。健人が白  
石組系暴力

団霊王会の暴  
力団員になっ  
たその三カ  
月後デモンズ  
の一人が謎の  
死を遂げ、金  
田は若頭に昇

進し、そして  
デモンズ入り  
を果たした。何  
の事はない、  
健人を殺し  
かけたのは金  
田その人で

警察から保護  
してやったとい  
うのを恩に着  
せ、今では舎  
弟みたいな扱  
いになっている  
だけなの

だ。これにて  
健人と、譲と  
静香は二度と  
会うことはない  
ような定め  
になったよう  
だった。

第二部 完

静香の霊的？能力（前書き）

書くの遅くて申し訳ございません。



## 静香の霊的？能力

「霊が見える」静香がそんな事を言い出したのは卒業間近の一月頃の事だったろうか。

最初静香は何を言っているのだろうか？　と思った。

「時々なんだけど白い鎧を着た男の人や女の人が見えるの」

「中世の騎士だろうか？」俺は話を合わせてはいたが、静香は病気になるってしまったのでは

ないかと疑っていた。「何か言ってる？」俺は聞いた。

「分からない。見たことも無いような金属製の衣服よ。最近、そう  
実地研修が終わってか

ら。」

俺は聞いてみようと思った。実地研修で誰か亡くなられた？　と。

「ううん、誰も死んでない。譲には話してなかったけど、私代々巫女の家系なの。私が生まれてから家族、親戚中、ペットすら死んだ事ないの。私、死というものに立ち会った事無いの。」

次に思ったのは憑き物じゃないかという事だ。現代社会ではもう見られないが、古代の伝統を受け継ぐ僻地の部族では狐等が取り付くことがある。日本でもかつてあった。

「ほら見て！ あの窓！」

え？ と思って振り返ってみると白い鎧を着た男女と思われる人間に角を付けた様な者達

が五十人くらいいるではないか。その方向を見ている学生達は特に気に留めず勉強を続けている。しかしそれらの者達は一メートルくらい浮かんだかと思うとテレポーターシヨンのように消えた。

「静香、俺にも見えたよ。一瞬だったけど。」

「何なのかしら。嫌な予感がする……。健人の身に危険が迫っているような。譲、あの神社に行きましょう。それから私の家に来て。」静香は今にも走り出さんばかりの様子で俺の手を引っ張った。

## 鉄砲玉

「おい健人鉄砲玉行つて来い」金田は言った。

そして拳銃を渡した。

六発の弾丸と冷たい銃身。それが二十歳そこそこの青年にどれだけの恐怖を与えたか。

ましてや鉄砲玉等……。

「これをやり遂げられたら、お勤め終わり次第空席の若頭にしてやる。どうだ俺はお前の事を誰よりも深く考えているだろう？」冷たく歪んだ微笑を浮かべながら。

「心配するな。相手は組員十数人の弱小な組だ。ターゲットは城戸組組長の命、何やらシャブでもヘロインでも大麻でもない新種のドラッグで稼いで勢力を拡大しかけてる。おそらくMDMAみたいなもんだろう。少し目障りだ。」

「断つたらどうなるんですか？」健人は聞いた。

金田は深く頷いた後「お前に行く当てがあるのか？ふふふ。ないだろう。ホームレスでもやるか？それならそれでいいぞ。小指は貰っておくがな。」

「……わかりました。」

健人は城戸組に向かった。

親に金を送る為だ、親に金を送る為だ・・・。

もちろん両親は搜索願いを出しているくらいだから、健人から金が送られてきている事については頭の片隅にちらと浮かぶくらいなのだが。

## シラレスとコレア（前書き）

これ完結するのかな？全く構想期間とか無しで書き始めちゃってるから訳わかんないんですけど。

## シラレスとコレア

神社に着いた。静香はある燈籠をずらそうとつか引っこ抜こうとしている。

「静香その下に何かあるのか？」

「うん。讓これどかしてくれない？」

よいしょ、よいしょ。そんなに重くはないがその燈籠は異様に冷えていた。手の平の皮が

持っていかれそうだ。なんとかどかした。その下には四角い穴が掘られていて箱の様な物が

あった。

「良かった。まだあった。」

「何なんだい？それ。」

スケルオブシラレス、静香は難しい英語みたいな名前でその物体を呼んだ。

「この片割れが私の家にあるの。お婆さんが昔使っていた物なんだけど。」

何に使うのだろう。巫女というくらいだから何かの神事だろうか？

「シラレスには千里眼みたいな能力があるの。もう一つはアンセシアコレアって言うんだけど

どその二つを並べて使うと何か不思議な事が起こるのじゃ、ってお婆ちゃんが言ってた

わ。でも誰も使った事が無い。だから何が起こるかわからない。いやお婆ちゃんが一度使っ

た事があるんだけどその後いなくなってしまったの。怖くなって私は二つの珠を別々の

所に隠したの。」

静香は回想するように言った。

「あれは私が原因不明の高熱を出して、医者も訳がわからず日本脳炎かもしれない、いやマ

リアアか？なんて言っていた時、お婆ちゃんが大丈夫、ワシが治してやるって言っ

て……。コレアには転送能力があるの。人は駄目なんだけど物は送れるの。お婆ちゃんは

その時から行方不明になって、すぐにパピルスみたいな古代の紙みたいな物に包まれた薬

が私の元に届いて、私は助かったの。もしかしたらお婆ちゃんはシラレスとコレアを同時に

使ったのかもしれない・・・。」

ちよつとにわかには信じられない話だ。俺は思った。あまりに非科学的だ。静香は俺の手を

引っ張つてまず私の家に行きましょう。実は一度使ってからこの珠は力を失っていたのだけ

ど、今私達の身には何か不思議な事が起ころうとしている。誰かが動いている。シラレスを

使つて健人の居場所が探れるか試してみましよう。静香はそう言った。



## 城戸組の事務所

鬱蒼と雑居ビルが生い茂る街の中心部、一階にサラ金、二階に雀荘、三階にマツサージと称

した風俗店が入っているビルの前に健人はいた。このビルの四階に城戸組の事務所がある。

健人はエレベーターの中で誰かと一緒になれば不安で吐きそうになる事を懸念して、四階ま

で階段を使った。

安っぽいスニーカーが階段を一段登る度にネチヨネチヨと嫌な音を立てているような気がし

た。軽い目眩で自分が上に行っているのか下に行っているのかわからない、地獄に向かって

いるのではないか。そんな錯覚を起こさせた。

四階、三つテナントがあるようだったが、中央の一部屋以外は空き室のようだった。その中

央の部屋には何も表示はなかったが、人の気配とラジエーターの回る音がした。

健人はゴクリと唾を飲み込んでから懐のピストルを確かめドアノブに手をかけた。

「ガチャリ」

鍵は掛かっていなかった。

健人はドアを開けた。ピストルを片手にしながら。

「白石組系霊王会の愛田健人だ！城戸は何処だ！」

「！」

健人は驚いた。十数人の組員と思われる人々は三十畳はあるだろうか、その畳の上に座布団

を敷いて座りながら寝てる・・・嫌死んでる！

「健人君待っていたよ。」

その声は顔はシドだった。

シド様一体これは・・・。

「前世のカルマか、今世のカルマか。みんな死んでしまったよ。デモンズティアを飲んで

ね。君がくる事はわかっていたから。」

そついうシドの瞳は左目が緑に右目が赤に輝いていた。

「この子達も連れて行くこうと思っていただけだよっぱりダメだっ

「たみたいだ。」

「健人君、君だけでも連れて行くよ。大丈夫、前言っただろ。この薬を飲めば自分の進む道

が開ける。思い通りにね。」

「さあ・・・」

健人はシドの瞳に吸い込まれるようにその薬を鼻から吸った。

静香の母に告げられたのは。(前書き)

久々の更新ですが、やっぱり疲れるな。(汗)  
間空け過ぎてるから自分で第1話から読まない  
と書けないというへたれぶり……。

## 静香の母に告げられたのは。

静香の家に着いた。広い庭は松などが植えられていて日本庭園の雰  
囲気を醸し出している。

「本堂に行きましょう。」

「あ、お母さん……。」「静香がそう呼んだ女性は白装束に身を包  
んだ美しい女性だった。

「コレアが急に光りだしたの。どうしたのかしら。」

「シラレスを使ってみる。健人が何処にいるのか。」

「健人君？高校の卒業式から行方不明なのよね？」

「ええ……。」「

静香はシラレスを台座に置きじーっと眺めてあぐらを組んだ。

「譲こつち来て。見える。」

暴力団の事務所のような。人がたくさん倒れている。

男がいる。左目が緑で右目が赤の白髪、真っ白だ。上から下まで。  
目を除いて。

「あ、健人！」少々容貌が変わっているようだが、間違いなく健人  
だった。

二人で何か飲んだかのように見えたかと思うと同時に「ヒュン」と二人は消えた。

「健人！健人！」静香が叫ぶ。

静香のお母さんが言う。「誰かいるわ。屋敷内に。気配を感じる・・・。」

それはあの大学の講堂で見た白い鎧のような物を着ているこの世界では全くありえない、

前と同じ様に少し空中浮遊している彼、彼女らだった。性別の区別がよくつかないが。

寄ってきて「邪悪な者達ではなさそうね。静香、譲君、安心しなさい。私は少し呪術を使え

るし」そう言う静香のお母さんにその者達は言った。

静香様はいずれ私たちの王国で王となるお方なのですと。

マンガドット (前書き)

ダメだ。いよいよわけわかめだ……。。

## マギドPC

「う、ここは一体？」

「目覚めたかい、健人君」

「シド様・・・僕は確か」

「いい、思い出さなくても。ここでは必要ない。」

健人の目の前には銀色に輝くキノコ雲があった。

正確には今まで見た事が無い金属で作られていて

中に水の浸ったポッドのような物があった。

周りには草木などが生い茂り美しく、辺りを取り囲む鏡は

近付くと外が透けて見えるようになっていた。外は真っ暗だった。

「健人君こちらの世界では大気中の成分が少し違って直に呼吸が出来なくなる。」

あの、マギドPCの中に入って転生するんだ。」

「マギドPC、転生・・・。」

「分からない事だらけだろうけど転生と言っても性別が変わるだけ。IDタグを作るにはマギドPCによって前居た世界の情報、思考回路を

ちよつと検査して変身しなくてはならないんだ。」

「シド様も女だったのですか？」

「いや、私は違う。まだ知らなくてもいい。」

早く早くと急かすシド様に手を引っ張られて、キノコの形をしたマギドPC

のポッドへの階段を健人は登っていった。



## 異世界の現状（前書き）

自分で書いていてなるべく覚えやすい横文字で名前を付けているの  
だがそれでも忘れる。語感があまり良くないようだ。

## 異世界の現状

「え？何の事？」静香は素っ頓狂な声をあげるしかなかった。

「貴方達何者？この世の者達ではないようね。」静香の母にはそのもの達の一風変わった気配を感じ取れるようだ。

俺はただびっくりするだけだった。静香は女だし、女帝になるって事？突然すぎてその話の信憑性について思い巡らせる判断能力は失われていた。

その者達は続けた。シドに対抗できるのは貴方達の持っているシリウスとコレアだけだと。

私たちの世界は、今極めて低い文化レベルにあります。それはシドがマジドPCを独占しているからなのです。昔は国は二つには分かれていなかった。しかしシドが彼は千年は生きていたのですが、時折人間界に降り立ち、属性というものを持つ人間を連れてきてジルバ、ああこれはシド達が暮らしている方の世界の名前です。ジルバの戦力として居るのです。戦争をしているわけではありませんが、属性を持つ人間が多い方が豊かになれるのです。貴方達の世界でも何処か異国の地に工場を建てたりしてコストを削減するでしょう？

ああ、私たちの国はマルクと言います。先程言った様にマジドPCが占拠されているので国交はありません。かつてエルクスという光の道が二つの国を繋いでいたのですが、それは今遮断されているのです。

貴方達には属性があるようです。ミニポッドに入るまではどのような属性かわかりませんが必ず私たちの力になりそうです。

少し考えて頂いてもしよろしければシリウスとコレアの力を解放し

て下さい。私達の国に転送されるでしょう。その二つの珠には意志があるのです。

静香も俺もまるでイリオモテヤマネコでも見つけたかのように啞然としていた。静香の母だけが何やら呟きながら思案に耽っていた。その者達は一瞬の内に消えた。

新・マリアード(前書き)

うーん、うーん便秘気味のようだ。中々長く書けない。集中力が続かない。

## 新・マリアード

ポッドの中に入った健人。「なんだろう凄く落ち着く。」  
シドが言う。

「羊水のようなものだ。新たに生まれ変わる為に必要な物。フフフ、私の実験の成果。」

キラキラと輝いた後・・・、健人の姿が変わった！漆黒の長い髪、大きな胸、スレンダーな足。ドレスのような物を着ているが、触ってみると鎖帷子のような。肩や二の腕、太腿等にもチタンのような防具が付いている。

「予想通りだ。健人君。君の属性は剣士だ。これからはマリアードと名乗るが良い。私の死んだ娘の名だ。」

「はい、シド様。」女の声だが何ら違和感が無い。まるで初めからこの体の中に魂が入っていたのではないかと錯覚するほどだ。

（しかしまさか千分の1程の確率でしか現れない剣士の属性がこの子だったとはな。思ったとおりだ。マリアード待っている。今に必ず、フフフ・・・。）

「シド様、私は何をすれば良いのでしょうか？」

シドは空ろな目で左目の緑と右目の赤がキョロキョロし何か考え事のように声をかけるのが躊躇われたが、「そうだな。まず練兵場に行きなさい。下級種族のゴブリンが沢山いるから好きに斬って構わない。食べても美味だぞ。」

マリアードは一抹の不安と不気味さをシドに感じながら言われたとおり練兵場に行く事にした。

健人の行方を本格的に追う2人（前書き）

大変疲れています。はい、そんな事は読者にはどうでもいい事なのですが。

1500人も読んで頂いて嬉しいです。いつかは完結すると思いますので。

## 健人の行方を本格的に追う2人

「お母さん私行ってくる」

「静香……」

「私の家の家系の秘密、シリウスとコレア、お祖母ちゃんがなくなった理由、色々知りたい事がある。この人達について行けばその秘密が解けそうな気がするの。」

「もう戻って来れないかもしれないわよ。」

「うん……私人助けがたくて今の大学に入ったの。でも心の奥底では有名になりたい、もっと力が欲しいって心の底で思ってたのね。王様になりたいわけじゃないけど、もっともっと広い世界が見てみたいの。」

騎士風の男が「私たちの国は意外に狭いですけどね。」と言って隣りの女（だと思われる者）と笑った。

「譲も来るわよね？シリウスで見たあの風景。男が一人いたけど目の色が緑と赤だったわ。きつと力を持つ者だと思っの。健人たぶんさらわれたんだわ。」

俺は静香の今まで見た事の無い、そう今まで2割くらいしか見てなかったものが10割見えた様な気がして苦笑いを浮かべたが、「そうだな、男手もまだ必要だろう。」

「……」白い鎧を来ている異世界の者達は少しバツの悪そうな顔をして、さあ静香様、と促した。

「わかってます。」「譲シリウスとコレアに触って。」  
言われるまま触った。静香は「汝千里を駆ける馬、昇って消える太

陽、月光の奥ゆかしさの元に我々を導きたまえ。」と唱えた。

緑のシリウスと赤いコレアが輝いたと思うと2人はヒュンと消えた。

よし我々も戻るか。その時静香の母が言った。「静香をよろしくお願ひします。」

「もちろんです。あの方は我々の希望ですから。」異世界の者達は皆一様に笑顔を浮かべ言った。



## 額の封印（前書き）

ちんたらちんたら進んでいきますんで。読む人更新遅えーと思って  
いると思いますが、これでも早い方だ！（開き直る。）

## 額の封印

私の名はマリアード。シド様を敵対勢力から守るのが勤め。いずれは師団長にしてやること

言われている。練兵場に来て3カ月近く経っているらしい。ゴブリンを千体は切った。最初

は苦戦したが初期装備の剣が血を吸うごとに切れ味を増すので少し役不足だが練兵場にも飽

きが来ているしもつと強い剣士と戦いたいという欲求が出てきた。私は確か肉が嫌いだった

ような記憶があるのだが、思い出そうとすると頭が痛くなるが細切れにしてやったゴブリン

の肉片を見ているとシド様が美味だと言っていた事もあって、スイッチをカチツと押すと火

が出る道具（これにも確か名前があったはずなのだが思い出せない。思い出そうとすると額

の菱形を形成している4つの印が痛むのだ。いつからついているのだろう。）を使い手近

にあったゴブリンの服を燃やして火をおこし焼いて食べてみた。特別美味しいとも感じな

かったが、後に血生臭い味が襲ってきて吐いてしまった。どうやら肉は受け付けないよう

だ。理由はわからないが。私は練兵場を後にして闘技場に向かった。ちっ、額が痛む・・・

。私はこんなに好戦的な性格だっただろうか。よく思い出せない。僅か3カ月でこちらの生

活にも少しは慣れた様だ。ここにくる前違う世界に居たのは微かな記憶でぼんやりと感じる

事はあるのだが、何せ額が痛んでしょうがないのはっきりしない。今はただ強くなりた

い。そう思う。

降り立った場所は（前書き）

異世界物って書くの楽しいね。名前とか結構テキストに付けちゃってもいいし。内容も多少八チャメチャでもバレない。（笑）

## 降り立った場所は

譲と静香は気を失っていたようだ。体に包帯が巻かれている。近くに2、3人いた。人間のようだが。譲はその者達に聞いた。「ここは何処ですか？」

その者達はここはマルクの辺境ですと答えた。「狭いとか言った割には辺境とかあるんだな。」「そうみたいね」

慌てた様子で、「貴方達はもしや・・・早く大僧正に会わせなくては。」「とその人間達は俺達に聞こえるように言った。

「何慌ててるんだろうね。」「譲貴方も少し慌てなさいよ。全然違う世界に来ちゃったのよ。それに見てこれ。」「

地面に赤と緑の欠片が散らばっている。「シリウスとコレア割れちゃった・・・。」「

静香はため息をつく。「何とかなるさ。後で使えるかもしれないから全部集めて持っていこう。」「2人であたりの地面をくまなく探しおおよそ集めきった。その様子を見ていた人間だらうけど区別する為にヒューマンと呼ぶかは、相変わらず慌てて「おい、馬車を早く持って来い。死んでしまうぞ。」「おう。」「などと忙しなかった。

静香が独り言を言っている。「おかしいわね。使っても術者の手元についてくる物じゃないのに。それに割れるなんて。でもこの欠片ホントに使えるかもしれない。」「と。

俺はどうやら好意的なヒューマンが馬車を持ってくるのを静かに待っていた。がなんか息が苦しい・・・。空気が俺達のいた地と匂い

が違う。静香も「なんだろう。頭痛い。」と言っているしどうやらこっちの世界では大気の成分が違うのではないかという結論に達した。

5分もしない内に馬車が来て「お二方早く!」と言っている。その声が段々遠くなって俺と静香は気絶した。

## バトルチェンジ（前書き）

何しろマンガと設定がかぶるのは避けたいが、ゲームのファイアー  
エンブレムのパクリだ。

## バトルチェンジ

闘技場は広く門は閉ざされていた。近くに黒い鎧を着た兵士が2人いる。「新入りか？」そう聞かれ「いや私は異国から来た者だ。右も左も分からぬ。」マリアードはそう言うしかなかった。「バトルチェンジは出来るのか？」「バトルチェンジ？」

こうだ。両の手の血潮流れるへモン我変化を望む者なり！

光がパーと辺りに輝いて兵士の姿が変わった。着物姿で刀を帯に挿している。「これは侍だ。シド様が異国で磨いてきた技術で剣よりも反応が早い。」変身していない兵士が言った。「お前属性は？」「属性？シド様が言うには剣士だが。」「何？お前がか！」

「我らはウォークポーン。この世界で最も普遍的な属性だ。珍しいのは剣士、プリースト、アサシン、ヒーラー、ウォーリアー、アーチャー、他にもあるが、師団長様達は皆剣士だ。」「そうなのですか。」

「まずバトルチェンジを覚えろ。三すくみの法則で自分の属性だけでは不利になる。仮属性つまりバトルチェンジが出来なければ闘技場のウォークポーン達にも勝てないだろう。」

「わかりました。」とは言ったものの何処へ行けばよいのかマリアードにはわからなかったが。少しこの国の構造を知りたいと思いとぼとぼと歩き出した。



## 大僧正

苦しいなあ、苦しいなあ、誰だ俺の首を締めるのは・・・苦しいよ、止めてくれ、目を開けてみると健人？の幻影。夢を見ていたようだ。うわ、唇が・・・俺の顔のすぐ近くには美しい女性の顔があった。「一体何ですか？」俺が叫ぶと「よしキューア隊、簡易ポッドにすぐ運ぶんだ。」「はい、ケアマネージャー様。」

横を見ると静香が横たわっていて男と唇を重ね合わせていて「ビクッ」となって意識を取り戻した様子だったが、俺はファーストキスを奪われ頭も混乱。簡易ポッドって何？という感じだった。

ストレッチャーらしき物に乗せられて運ばれていく俺。そこには中に水のような物をたたえた

縦型で楕円形の入れ物が5台並んでいて1番左の入れ物にキューアと呼ばれていた2人の男女に肩を抱えられ中に入れられた。

何だか知らないが呼吸が楽になり気持ちが良い。一瞬辺りに光が走った後・・・。

え？俺・・・切った筈の髪が肩のくらいまで伸び、胸はスイカでも巻き付けられた様に重い。これは・・・。

2人のキューアが突然恭しくお辞儀をした。「大僧正様。マルクの辺境で見つけた静香様のお連れの方です。」

大僧正と呼ばれた頭が丸刈りのお坊様みたいな背の異常に高い僧侶服を着た男は「ほっほっほ。」と笑った後、「うーんこれは凄い。W属性じゃ。ケアマネージャーに、何とブリストか。素晴らしい事だ。しかしええ体しとるのー。」鼻の下を伸ばしてそう言うので、

俺は何事かと思い自分の姿を見た。！！ 体が女になつてる。しかも裸だ。俺は慌てふためいてポッドから出て、素っ裸でさっきまで昏睡していた病室のような所に戻った。すると入れ替わりに静香がストレッチャーらしき物に乗せられてポッドに入る所だった。

## 塩無しの海

どうやら私が転生したマギドPCはこの国の最も東にあるらしい。この異世界にどれだけの国があるのかまだわからないが、防衛上の観点からすればあれは中央に位置していなければおかしいと思うのだが。そこにも何か私の知らない秘密があるのだろうか。

シド様にしばらく会ってないので謁見する事にした。

「シド様お久しぶりです。」「おお、マリアードか。強くなったようだな。ゴブリンでは弱すぎたかな。」「いえ、1000体切るのに3カ月もかかってしまいました。」「そうか、で今日は何用?」

「はい、闘技場に行きバトルエンジンが出来なければウォークポーンにも勝てはしないよと門番に言われました。それにこの国がどういう構造になっているのかという好奇心もございました。」「なるほど。この国の一番東にマギドPCがあるのはわかってるか?」

「はい。」「私は基本的にここから動かぬ。隣国のマルクを見るにはここが一番近いからな。」「そう言って大広間の中にたくさんある内の一つの部屋に案内された。」「私の目には千里眼の力があるが最近歳のせいかあまりよく見えぬ。故にこの大望遠の置いてある部屋から時折マルクの動向を気にしている。敵対勢力と言うほどの物でもないが、マギドPCの占拠を力もなくせに狙っているようだからな。このブラックハウスの中は自由に移動する事を許可する。しかしマギドPCに続く大門には近付くな。と言ってもあそここの門は第一師団長ギューンが部下と共に厳重に警戒しているがな。」「と言った後、他にもアレを狙う空中海賊やモンスター同盟等未知ではあるが敵はいるのだから。バトルエンジンを習得したいなら一番西にある「塩無しの海」でクラッケンに認められれば1つか2つ開眼するであろう。遠いからオートバイクに乗っていきなさい。そう言われた。

静香はキング見習い（前書き）

間を空けると自分でもどんな話だったか忘れる・・・。

## 静香はキング見習い

巫女服姿の静香はポッドに入り液体がキラキラ光る。次の瞬間鎖帷子と鉄製のガードルに身を包んだ少し長い髪の男が現れた。俺はとりあえず現実世界で着ていた服を見つけて着のみ着のままその静香が男になる瞬間を見ていた。

ゆっくり階段を下りてくる静香。何かもじもじしている。「ねえ譲私どうなっちゃったの？」

ああ、静香はかなり気が動転しているようだ。「転生したんだよ。男に。」「えー！」静香の細身の体はそのまま戦いに向いているとは思えないが。僕は大僧正に静香の属性を聞いた。大僧正はあごひげを触りながら「キング・・・見習いじゃな。」「ずっとこける俺。」

そう言えばあの白い鎧を着ていた男女も「いずれ」王となると言っていたな。

とりあえず記憶の混乱はないようじゃな。とりあえず言葉使いを直す事から始めて欲しいのう。大僧正が言う。そんな急には無理だ。

20数年俺は男、静香は女をやってきたのだから。

「善処します。」俺と静香はそういうしかなかった。「譲君その服では目立つから僧侶服に着替えてもらえないだろうか。」「そうか俺はケアマナージャーとプリーストの属性だったな。この格好では受け入れられないだろう。辺りを歩いている異世界の住人はみな鎧や白衣を着ている。白衣を着ているのは先程俺を連れてきたキューアという属性の者が大半のようだ。鎧を着ている者は剣士のように見えるが剣をさしていない。「着替えてきますね。」「俺はそう言ってこれで良いのか?」と思いつつ女性用の更衣室に恥ずかしながら入って僧侶服に着替えた。

## V S クラークン 1 (前書き)

何かこの作品どっかで見たような気がする平凡な作品だなあと思うが、  
デジャヴユなのかね？

## V S クラーク 1

オートバイクルとはどういう乗り物なのだろうと思っただろうやらヒューマンの血で走る乗り物のようだ。2リットル血液を失えば死ぬというから、この動力炉に直結している管の太さから出血量を推測して走るしかあるまい。コポコポと溜まっていく血液が500ミリリットル程になった所で出発する。

軽くふらつくが・・・何キロメートルくらい走れるだろうと思っただがこのオートバイクル、カプセル型になっていて速度計は何と200キロを表示している。10分も経たない内に海に出た。つまり私は計算が苦手なのだがもしこの地が円をかたどっているとすれば半径20キロメートル程にも満たない広さという事か・・・。帰りの事を考えると手荒な方法でバトルチェンジを習得するのはキツイ。

さてどうしたものかと考えていると遙か彼方地平線から何かがこちらに向かってきている。

あの先にも国があるのだろうか等と思案している間に辺りは微かに暗くなった。

「なんだ？」マリアードが見たものは巨大なイカだ！イカの化け物！  
「久々の餌だな。我はクラーク。腹が減っていた所だ。丁度良い肉等久しぶりよ。」

マリアードは言った。「ちょっと待ってくれ。私はシド様の命の元にバトルチェンジを習得してきたのだ。」  
「そういうと黒い眼球の中の金色のリングが、がっと開き「シドか。また我の事を試すつもりか。こんな小娘をよこしおって。」

「何の事だ？」マリアードが聞くとクラーケンは「その剣、血を吸ってかなり強化されているな。バトルチェンジしたければ私の10本ある腕を全て切り落として見せよ。そうして私の吐き出す墨が砂浜に極意を示すであろう。第一師団長のギューンは5分で終わらせなぞ。全く全ての腕が復活するまで1月かかるといふのに！」そういうとクラーケンは襲い掛かってきた。「くっ！意外に素早いな。」10本も腕があるのだ。マリアードは一瞬で戦略を立てる必要性に迫られた。



## セイント(前書き)

ドラクエのダーマの神殿とかを思い出して頂けるとっくくりくると  
思っています。。。

## セイント

「あの大僧正様、お聞きお聞きしたいのですけど！」譲は何とか女っぽく振る舞おうとしている。実は着替えている時自分の身体を見て鼻血を出している。

「何かな？」「あのW属性が何とかと仰られていましたが。」「お、譲ちゃんは2つの属性を持って転生したという事じゃ。」「何か良い事があるのですか？」大僧正は髭をさすりながら別にないのうと言った。ずっこける俺、じゃなくて私。「嘘じゃよ。ケアマネージャーはキューアの上位属性じゃ。マギドPCを占拠されエルクスが断ち切られてから3百年。簡易ポッドで転生して人口の増減、年齢の高齢化を避けていたのだが、簡易ポッドは1人1回しか使えん。それで体力の低下と共に老人が増え出したのじゃ。それが何を意味するか、分かるかのう。」私は介護を学んできている。しかし人間の平均寿命は男女平均して80歳くらいだ。もし3百年も生きている生物がいたら年齢と共に減少する物質が必ずあるはず。異世界の人間と言っても形作っているのは「水」が半分以上を占めるのは間違いないからだ。

「動けない人が増えてきているという事ですか。」「まあそういう事になる。マルクの人口は減少傾向を示している。忌々しき死という呪いによって。」「死が呪いですか？」「そうじゃ。本来は転生という手段に依って記憶を紡いできたのじゃ。そしてこの土地が落ちない理由もちゃんとある。」

「はあ。」「私にはこの世界の事はまだまだ理解出来そうも無い。」「つまり簡素に言うが転生を許されない悪事を働いた者達がいる。その者達のフィリンによってこの土地は浮いているのじゃ。」「フィ

リン、浮いている……。」「まあ良い。今度話そう。」「

大僧正は「ワシの部屋にセントが2人いる。重鎮じゃ。セントはケアマネージャとプリーストのW属性を持つ者しかなれぬ。師事して、少し励め。静香殿は私が教育しよう。」「

そういうと男の姿の静香に抱きついて「えーん静香君、イイ男になりおって。女子を泣かすなよ。」「そう言うか言う前か、このスケベ！とビンタが飛んだ。

## VSクラーケン2 (前書き)

クラーケンは化け物なので手が体の左右に生えているのです。

## V S クラーケン 2

マリアードは粘着性のありそうなクラーケンの白い肌に閃いた。「とんとんとん」と体を駆け上がり背中に戻ったかと思うと「はっ！」と気合を入れ一瞬の内に5本の腕を切り落としてしまった。僅か1分にも満たない。「グワー！」と悲鳴をあげたクラーケンは大量の墨を吐き出し砂浜に文字が浮かんだ。読み上げるマリアード。「武器の極意知りたもう者全て我の力を貸与されし者。我の黒血と自らの血を混ぜ合わせ飲むが良い。斧使いはウォーリアに、弓使いはスナイパーに、刀使いは侍に、くない使いはアサシンに、剣使いはソードマスターとなるであろう。」と読めた。「頂くぞ。勝負はついただろう。」「く！痛い！痛い！何だその剣。刃がこぼれてポロポロではないか。ギューンの剣は研ぎ澄まされていたぞ。」「クラーケンは断面がグチャグチャの腕の傷を残った腕でさすっている。」「仕方ないだろう。休まずこの剣で修行しているのだ。」「

空になったオートバイクルの動力炉の入れ物を使って墨を採取し、マリアードは自らの指に傷を付けピンを振って混ぜ合わせ飲んだ。するとマリアードの持っていた剣がパーッと光ったと思うと鋭く研ぎ澄まされ衣服が黄金の素材に変わった。それは編み込みで重さを微塵も感じる事が無いどころか羽が生えたように体が軽くなった。「これは良い。バトルエンジン成功だな。しかし剣の魔力が消えたか。まあ良い。剣士に戻れば良いだけの話だからな。」「鞘が2つになって片方の鞘はソードマスター、もう片方の鞘は血まみれで剣士に戻るようだ。」「助かった。クラーケン。こんなに容易いとは思わなかった。ついでにオートバイクルの燃料にこの墨を使おう。壊れた所でシド様も怒りはしないだろう。」「

ブーンと威勢の良い音を立てて走っていくマリアードの姿が消える

までクラーケンは震えが止まらなかった。

## 何この女？（前書き）

セイントが出てきました。譲、静香パートは書きづらいたので短めです。

何この女？

大僧正の部屋には50代くらいの初老の男性と20代くらいに見える若い女性がいた。この人達がセイントか。

「話は聞いているよ。譲さんと言ったね。類稀なる気力をお持ちのようだ。」

女のセイントは口を閉ざしている。警戒しているようだ。

「あのー俺っていつか私女に転生したんでもうちよつと気さくな感じで、そうフランクに、フランクに。」

女のセイントは「私も昔男だったから関係無い。ただお前のスケベそうな顔が嫌なだけだ。」

「そうですか・・・」

「忠告しておくが、若く見えても私達はお前達の世界の感覚では実際の歳は分からないし何度も転生しているものは生殖機能が普通と変わってる場合が多いから子供等を作ろうとするな。そういう行為もするな。」

「はあ、肝に銘じておきます。」（今の所美男子とも会ってないし関係無い話だな。）



ここは冷えます（前書き）

えーんえーん連載ありすぎー。疲れちゃった。読んで感想くれるとやる気出るんだけどな。（イジイジ）

「ここは冷えます」

「バトルチェンジ習得してきたぞ。」

門番は怪訝そうな顔をして「お前がクラーケンを？」と言った。

「思ったより容易かった、さあ中に入れてくれ」

門番はひそひそ2人で話しながら女の出場者は滅多に居ない0の付く日が大会の開催日だから今はこの予約帳に名前を書いておいてくれ

という趣旨の事を言った。

「マリアード」そう記入してとりあえず闘技場を去った。

シド様の所に行くか……。

「シド様。」

「ん、マリアードか。」シドはまたマルクの方角の見える望遠鏡のある高台にいた。

「シド様ここは冷えます。」

玉座にお座りになり部下にそのような雑事は任せた方が良いかと。」

「はっはっは、かりそめの王の座など興味は無いわ。それに人があまりいない。ふむ、墨の匂いが染み付いている。クラーケンを倒してきたか。ゆっくり風呂にでも入りなさい。女は身だしなみに気をつけなくてはな。」

その背中は少し寂しそうだった。

バスタブに浸かり体を洗っているうちに額の痣がキュンキュンと痛んだ。「シド様のお姿を見かけ思いを巡らせるといつも痛むな。一体いつから付いたのやら。」

タオルで体を拭き新しく手に入れた剣の方を引き抜く。シルバーで軽量の鎖帷子に黄色い鉄を編み込んだスカート、金属のブーツ。

ふん、この薄汚い剣を使っていた時とはまるで違うな。しかし魔力というよりも科学の力か……。私にはゴブリンの相手の方がしっくりくるが。

まあこまめに使い分け魔力も科学力も鍛えるか。

髪を拭いたマリアードは天蓋付きの柔らかそうなベッドを無視してソファに寝転んだ。

## 冷血の風穴（前書き）

どうもすいません。遅い上に短くて。ホント自分の才能の無さが嫌になる今日この頃です……。

## 冷血の風穴

セイントになる為にはキュア（治療）、破魔調律（呪文）、ケアマネジメント（読心術）が必要となるわ。とりあえずマルクの東の果てに「冷血の風穴」と呼ばれる洞窟があるの。

そこにはモンスターが居るのだけどその洞窟に開いた風穴を埋めないと酸素が大量に入って来て私たちには害となるのよ。

譲はそこに行ってキュアをやってもらいたいの。キュア10人つけるわ。見ているうちに力が開花すると思うから。何しろ人口が1000人程の国だから精鋭の30人しか送り込んでないのよね。ドブロボというモンスターで鋭い牙と爪を持っていて毒が仕込んであるから。

貴方は戦わなくていいわ。破魔調律を覚えないと戦闘は無理だから。もし話せないほど傷ついた者がいたらその者の胸に手を当ててごらんなさい。このクリスタルを渡すわ。それでケアマネジメントが出るはず。

いきなり実戦だけど貴方ならキュアとケアマネジメントの要領はすぐ掴めると思う。W属性だし。破魔調律は退魔結界を張って1カ月訓練しましょう。

「はあ。」色々言われて少し混乱する譲だった。

「私モリスよ。女、男、女と転生してるわ。だから若く見えるの。こっちはジョージよ。」

うーんますます混乱する譲なのですた。

私は夢を見ない(前書き)

間空けちゃうと読者数も減るし、自分で「何書いたっけ？」って作品読み直してるんだから世話無いしWWW

## 私は夢を見ない

私は夢を見ない。かつて見た事があつたような気もする。寝てる間は退屈する事も無いし、無理に夢など見る必要も無い。しかし分らないのは私の両親だ。どうでもいいと言えはどうでもいい。ただひどくお世話になった様な気がして夢で会えたらなあなどと時折思うが、私にはシド様という絶対的な君主がいるわけで、そしてまるで父親のようにお慕い申し上げている。

ただこの記憶障害はシド様に出会ってから。それも急にだ。その点に関して少々疑いを持つているのも事実ではある。私が記憶を取り戻したらどうなるのだろうか？気が狂うのだろうか？それとも暖かい団欒でもあつたのかしらね。今となつては本当にとっても良い事だけだ。

私はまだ一兵卒に過ぎないのだから。力をつけてシド様の大願を成就させたい。危険かもしれない……。ふとよぎる。私はシド様の事を殆ど知らない。しかし……。そこで思考が途切れた。代わりに今日が0のつく日である事を思い出す。

鎖帷子では少々心許無い。防具屋で甲冑を買うか。動きは鈍るが私は死ぬ訳にはいかない。

大会ルールでは相手を殺してはならないという規定があるにはあるが万が一という事もあるしな。

ああ、気付いたら下着姿で寝ていたようだ。この癖も何だかフラッシュバックする体験のような気もするが気のせいだろう。

しかし一応女なのにはしたくない。私はシャツに青色の所々穴の開い



た（これは何という名前であったか、ええい！）服を着て出かけた。

任務遂行（前書き）

破魔調律が使えるのは何時になるんでしょうね？

## 任務遂行

譲は足の速い馬に引かせた馬車に乗って冷血の風穴に向かった。「ここですか。」「譲様、私達はあくまで運転のプロ、戦闘には参加できません。ここからはお一人で。」「わかったよ。」「その洞窟は一步踏み入れるとひんやりし、三歩歩くと心臓が凍りつきそうに寒い。遠くから人の叫び声、怪物の咆哮のような物が聞こえ落ち着かない。更に奥に進む。そこにドロブロボだと思われる怪物が十体ほどいるようだ。ひのきの棒でドロブロボを何度も何度もぶっ叩いている戦闘部隊と倒れたキューア達がいた。

一人ドロブロボに噛み付かれたものがあるようだ。喋る事も出来ない譲は早速モリスの言ったとおり胸に手を当ててみた。するとどうだろう、瀕死の男の心の声が聞こえる。

「うう、苦しいし手足が痺れる。俺はこんな所で死ぬのか？」

非常に危険な状態だと譲は認識した。大声で誰か解毒剤持っていないか？と叫んだ。

「ほらよ。」「ドロブロボと戦っていた戦闘部隊の一人がドロブロボに背中を向け危険も顧みず解毒剤をくれた。」「注射は医療行為だから専門外んだけどな。」「とゴチながら血管を探る譲。

注射してしばらくするとその男は「いてて・・・」と呟きながら立ち上がった。

「あれ、譲様貴方が助けてくださったんですか？」「いや・・・俺は注射しただけ。

礼はあの大柄の男に言ってくれ。」「ああ、リーダーですか？流石傷一つ負っていない。」「

その男はドブロボを五体も倒し冷血の風穴を塞いだ。

「おお寒い」謙は聞いた。「貴方がリーダーなのですか?」「まあリーダーと言えればリーダーだがBグループだからな。ドブロボは毒が怖いだけでそんなに強くないし。」

「あ、僕ケアマネジメント出来ました。」「ほう、お前が異世界から来た救世主か。ええ乳しとるな。」お前は大僧正か!心の中で呟いた。

「今度訓練してやる。まあ俺よりジョージの方が強いがな。さあ帰るぞ。」

何とか任務を遂行した譲だった。

## ペリス（前書き）

ペリスとはシルバの基軸通貨です。

## ペリス

そうそうシド様から「この世界の通貨だ。10万ペリスある。好きに使うといい。」

と言われたのだった。防具屋で品定めを始める。「なあこの店で1番丈夫な甲冑が欲しいのだが。10万ペリスで買えるかね？」

防具屋のオジサンとオバサンは同時に「なんですと！貴方は何処かの貴族か？」と驚く。

何の事だろう？

オジサンとオバサンはこの店で1番高い黄金の甲冑でも2千ペリスですよと言った。

クロスと呼ばれて魔力を反射するとの言い伝えがある聖衣ですと。

「シド様ってお金持ちなのね……。一体何で稼いだのやら。じゃあそれ頂戴。」

「分かりました。でもかなり重量がありますよ。試着していききますか？」

「まあそうだな。いくら防御力が高くとも動けないのでは仕方が無い。どれどれ」奥の試着室で暖かい素材のインナーとパンツの上から甲冑を身に着けた。すると……。う！重い。「マリアードはその場にしゃがみ込んだ。

「どうでございますか？」オジサンは聞く。「凄い重さだな。男物か。」「まあそうでゲスが、貴方の体の左側に挿してある剣、かなり血を吸って魔力を蓄えているようだ。疾風丸という薬があります。それを飲むと魔力に反応して鎧が軽くなると思うでゲス。」

「ゲス、ゲス・・・」五月蠅い親父だ。まるで私が下賤の者のような気がしてくる。

「その疾風丸というのは？」「はい、近くの道具屋に売ってると思うでゲス。一粒百ペリスくらいでしょうかね。」「そうか・・・」時間が無いが寄って見る事にするか。

しかしこの防具屋凄くボロいが信用出来るのかね。マリアードは少し不安を覚えながら書いてもらった地図を見て道具屋に向かった。

一時帰還（前書き）

梅昆布茶が

何で出てきたかって？

今飲んだら美味しかったからさ！



## 一時帰還

謙達は都に帰ってきた。セイントのジョージとモリスが管理責任者となっているピコルムに行きケアマネジメントに成功した事を報告する。

「ふーん、あのクリスタルさえあれば誰でも出来るからね。」とモリス。

「しかしピーターからの報告によるとドブロボの毒液を中和する薬剤を注射したそうじゃないか。」

「ピーターさんで誰ですか？」と謙は聞く。

「ああ、君に解毒剤を渡した男だよ。肉断骨決の勇という2つ名を持つている。」

「へー。」

「まあ、君はあちらの世界で医学を学んでいたらしいから別に不思議はないがキユーアとなる者は基本3本指なので注射は苦手なのだよ。」

「え、みんな手袋してるから気付かなかった・・・。」

「彼らもコンプレックスなんだ。治癒を行う時にバーストライアングルという一種の印だね。それを作る為にキユーアは基本的に3本指なんだ。昇格する時に指を2本移植する。」

「うーん、何か気持ち悪くなってきた。」

「はっはっは。まあ君達の居た世界とは少し勝手が違つかもしれないな。」

そう言ってジョージは梅昆布茶（大好きらしい）を啜り、モリスはブラックコーヒーを必死にふーふーしながら飲んでいた。

（何か人間らしいな・・・）梅昆布茶を美味そうに飲むジョージと猫舌のモリス、他の人々もみんな優しかった。

譲が着々と成長している間に静香はマルクの王、フラウ・アリス・ザックハルトに謁見していた。大僧正と共に。なんとマルクの王は現在女性が務め上げているのだ。

普段騒がしい大僧正も口をつぐみ恭しく膝まづき、静香も精一杯の礼を尽くす様に、右手を軽く左わき腹の辺りに留め置き礼をした。

## 道具屋にて（前書き）

今回少しマリアードの心理について描写出来たので良かったと思います。

基本的になんか人物描写とか世界観とかシカトしてるので、改め、より丁寧に読みやすい優しい小説を目指したいですね（＾０＾）

## 道具屋にて

「防具屋の紹介で来たのだが。」

若く青色の髪と紅い瞳の青年が道具屋から出てきた。  
う、カツコ良い・・・。

「何をご所望で」

「あ、あのし、し、疾風丸」

「何個入りますか？」

「あ、ああ沢山だ。」

「お客様お金持ちそうですね。」

おそらくこの金色の鎧を見ていつているのであろう。  
は、恥ずかしい。

「では疾風丸50個で5千ペリスになります。」

「ど、どうもー。」

マリアードは逃げるように駆け出した。

青年は「あ、疾風丸には副作用があるんだけど  
あんな逃げるように立ち去らなくても・・・。」

美男子は自分を美男子とは気づかない物である。

その頃マリアードは疾風丸の副作用で目的地を大きく外れ

時速50キロという超絶な速さで走りながら街から飛び出し森の中  
に突っ込んで喉はカラカラになるし、足は筋肉痛。

近くに泉があつて綺麗な水だったので喉の渴きを潤した。

「何だっただ、一体・・・。」

訳もこの場所も分からず泉の側にたたずむマリアードは

記憶障害があるのですっかり乙女心、女性としての感情を抱いているのであった。しかし彼女がそれをひた隠し戦うのにも理由がある。

結局しょうがないので疾風丸をもう1錠飲みまた訳のわからないまま闘技場に到着したマリアードなのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1673m/>

---

テイルズオブサイレンス

2011年12月29日02時53分発行